

所管事項調査に関する資料

| 目次 | ページ |
|---|-----|
| 1 「第6回核兵器廃絶—地球市民集会ナガサキ」及び賢人会議 について | 1～5 |
| 2 訴訟の現況について | 6～7 |

原爆被爆対策部

平成30年11月



1 「第6回核兵器廃絶－地球市民集会ナガサキ」及び賢人会議について

(1) 第6回核兵器廃絶－地球市民集会ナガサキについて（報告）

ア 事業内容

- (ア) 期間 平成30年11月16日（金）～18日（日）
- (イ) 会場 長崎原爆資料館、長崎市平和会館ほか
- (ウ) 主催 核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員会 委員長 朝長万左男
(構成：市民・長崎県・長崎市・公益財団法人長崎平和推進協会)
- (エ) 総事業費 15,000千円（長崎市8,000千円、長崎県6,000千円、参加登録費等1,000千円）
(予算額)
- (オ) テーマ 核兵器のない世界をこの手に
～禁止条約とICANノーベル平和賞を力に～
- (カ) 会議内容及び成果

集会は、11月16日から18日までの3日間開催し、開会・閉会集会や分科会、特別企画、その他NGOブースや自主企画、ピースウォークなどの関連イベントに延べ3,580人の参加があった。

分科会では、それぞれのテーマの現状や課題、方向性などについて参加者とコーディネーター、パネリストとの間で活発な議論がなされた。

特に、外務省が設置する「核軍縮の実質的な進展のための賢人会議」の委員である核軍縮の専門家4人がパネリストとして参加したことは、それぞれの会議の参加者同士の交流や集会における議論の活性化へとつながった。

また、「次世代とつくる核なき世界」をテーマとした分科会3においては、市内の大学生を中心に企画運営し、県外3名、海外17名の大学生のほか、高校生も多く参加し、「Youth Network for Peace 構想」として、現在、核兵器廃絶の共通の目的をもってそれぞれ活動している若者たちのネットワークの仕組みづくりが提案された。

閉会集会では、集会の集大成として「長崎アピール2018」を採択した。



【長崎アピール2018骨子】（アピール全文は資料3～4ページに記載）

- 1 世界の全ての国に核兵器禁止条約の早期批准とNPT条約第6条の誠実な実行を要請し、中でも、米国とロシアの核兵器削減のための対話と軍縮交渉の開始を強く要請する。
- 2 核抑止力に依存する全ての国に対し、核兵器の役割を低減・廃棄し、「地球市民の安全保障」に基づく安全保障政策への転換を要請する。
- 3 最近の南北対話、米朝対話の進展を心より歓迎し、対話の中での約束を忠実に履行するとともに、北東アジア非核兵器地帯の設立に向けて交渉開始を要請する。
- 4 被爆者人口が減少する中、若い世代のイニシアティブに勇気づけられた。全ての世代が被爆者の悲劇的な経験を次の世代に継承していくことを要請する。
- 5 唯一の戦争被爆国として日本は核兵器依存の終了させ、核兵器禁止条約の署名と北東アジア非核兵器地帯を促進する努力を真摯に行うことを要請する。

(キ) 参加者等

| 回 | 開催年 | 日数 | 参加者 (延人数) | 分科会 | 参加登録 |
|---------------------|------------------------|-----------|---------------|----------|-------------|
| 第1回 | 平成12年11月17日～20日 | 4日 | 5,625人 | 10 | 493人 |
| 第2回 | 平成15年11月22日～24日 | 3日 | 6,765人 | 8 | 411人 |
| 第3回 | 平成18年10月21日～23日 | 3日 | 3,782人 | 6 | 274人 |
| 第4回 | 平成22年2月6日～8日 | 3日 | 3,833人 | 3 | 235人 |
| 第5回 | 平成25年11月2日～4日 | 3日 | 3,280人 | 4 | 188人 |
| 第6回 (今回) | 平成30年11月16日～18日 | 3日 | 3,580人 | 4 | 246人 |



長崎アピール2018

「午前零時まで2分前」—2018年1月25日、米科学雑誌「プレティン・オブ・アトミック・サイエンティスト」が発表した「終末時計」は、世界に衝撃を与えた。人類滅亡までの時間を示すその時計の針を30秒縮めたのである。その結果、1947年に同雑誌が発表を始めて以来、最も「終末」に近い時間となったのである。さらに、現在の状況は悪化の傾向にある。第一に、米国は核兵器の役割を増大させ、より「使いやすい」核兵器の開発と配備を明確にした「核態勢の見直し」を発表、第二に、米国はイランとの核合意「共同包括実施計画」をもはや履行しないことを言明、第三に、歴史的意義のあるロシアとの中距離核戦力（INF）全廃条約を廃棄する意図を公表した。

世界の核弾頭数削減のペースは最近落ちてきている。現在推定で14,450発程度が存在しており、そのほとんどは米・ロシアの所有である。そして、それぞれの弾頭は広島や長崎を破壊した原爆のけた違いの破壊力を有しているのである。米国の「核態勢の見直し」に対抗して、ロシアも新型で「防衛不可能」な核兵器の開発計画を公表した。さらに中国、フランス、インド、イスラエル、パキスタン、英国が「核兵器近代化計画」に取り組み、当分の間核戦力を維持しようとしている。核兵器に利用できる核物質（高濃縮ウランと分離プルトニウム）の在庫量も、核弾頭に換算して10万発以上に上っており、さらに増加している。全核保有国が戦争を想定し、そのため軍事対立が破局的結末につながる可能性が消えていない。いわゆる5大核保有国は、1970年成立の核不拡散条約（NPT）の義務遂行を無視し、条約違反を続けている。その義務とは、核軍拡競争を終了させ、核兵器廃絶に向けて、早期に「誠実に」交渉を進めることであった。

一方で、2017年7月の核兵器禁止条約（TPNW）の歴史的な成立とそれに続く核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）のノーベル平和賞受賞は、私たちに希望と力を与えてくれた。現在までに、69か国が署名し、19か国が批准した。TPNWは確かに核保有国・「核の傘」国と非保有国との間の溝を広げたかもしれない。しかし、世界の過半数の国がTPNWを支持し、さらにTPNWは核兵器が「絶対悪」であり、国際人道法とは共存しないものであるという「規範」を強化したのである。

さらに、北東アジアでは有望な状況が生まれつつある。南北朝鮮の首脳会談は「朝鮮半島の非核化」への希望を広げ、シンガポールで開催された歴史的米朝首脳会談は、朝鮮戦争が終結し、両国間の敵対的関係がついに終了するという希望を与えてくれた。まさに今こそ、日本を含む「北東アジア非核兵器地帯」の設立にむけて前進し、北東アジアに持続可能な平和と安全を実現する絶好の機会とすることができる。

被爆者証言と運動は、核時代が始まって以来、核兵器廃絶運動の力強い原動力として働いてきた。しかし、私たちは、被爆者の方々が自らその体験を語れる時間がだんだん少なくなっている現実をしっかりと受け止めなければならない。被爆者の方々の耐え難い体験を、次の時代に伝えていく革新的な方法を生み出していくことが不可欠である。その方法としては、写真、音楽、映画、アニメなどの方法が含まれるだろう。その中でも特に、若い世代が核軍縮により積極的に取り組み、自らの力で平和教育や運動を始めていることは、本当に勇気づけられる。

日本のいわゆる「核のジレンマ」（「核兵器廃絶の目標」と「核の傘依存」）はますます深まりつつある。日本政府は、核保有国・「核の傘」国と非核保有国の「橋渡し役」を果たすために「核軍縮の実質的な進展のための賢人会議」を設置した。賢人会議の設置は建設的な一歩ではあるが、日本政府はいまだにそのための効果的な提言を出していない。それどころか、日本政府はTPNWに反対の立場をとっているため、核軍縮・不拡散政策で方向性を見失っているかのようだ。その結果、核兵器廃絶を促進する主要な担い手としての地位と信用を失いつつある。そのうえ、莫大な量のプルトニウム在庫量を抱えているため、日本の核政策に対する疑心が生まれてきているのだ。

以上のような認識に基づき、第6回核兵器廃絶地球市民集会ナガサキの参加者は、以下のような具体的行動をとるよう要請する。

1. 世界のすべての国が核兵器禁止条約（TPNW）を早期に批准し、NPTの第6条（核軍縮義務）の誠実な実行、とくに核兵器国による実行、を要請する。中でも、米国とロシアは、INF全廃条約を維持し、2021年に失効する新戦略兵器削減条約に続く新たな核兵器削減のための真摯な対話と軍縮交渉を始めることを強く要請する。新たな軍縮交渉は、戦略核兵器のみならず、弾道ミサイル防衛システム、超音速ミサイル、そして宇宙の軍事化のような「戦略的安定性」に係る全ての側面を対象とすべきだ。また、まだ署名・批准していない国に対し包括的核実験禁止条約に署名・批准し、すべての国に対し核兵器転用可能な核物質生産を民生用を含め中止するよう要請する。
2. 核兵器を使用するという威嚇（「核抑止力」）に依存するすべての国に対し、核兵器の役割を低減・廃棄し、「地球市民の安全保障」に基づく安全保障政策に転換することを要請する。
3. 最近の南北対話、米朝対話の進展を、私たちは心より歓迎する。そして、これらの国々が対話の中で約束したことを忠実に履行することを要請する。その観点から、北東アジアの継続的な平和と安全を確立するために、朝鮮戦争の終結に向けて努力を加速することを要請する。朝鮮半島の非核化合意に基づき、地域内のすべての国が、実効性のある検証措置を備えた北東アジア非核兵器地帯の設立に向けて交渉を始めることを要請する。地域紛争が続いている国々においては、世界平和の構築に向けて、朝鮮半島で進行中の対話と信頼醸成に倣うことを要請する。
4. 被爆者の人口が減少する中、今回提案された「ユース・ネットワーク・フォー・ピース（YNP）」のような若い世代のイニシアティブに勇気づけられた。すべての世代に対し、相互に協力し、「ヒバクシャ国際署名」などの運動を通じて、被爆者の悲劇的な経験を積極的に記憶し次の世代に継承していくことを要請する。
5. 唯一の戦争被爆国として、日本政府は北東アジアにおける安全保障環境の改善を有効に活用し、核兵器への依存を終了させ、TPNWの署名と北東アジア非核兵器地帯を促進する努力を真摯に行うことで国内外の信頼を取り戻すよう要請する。

私たちは、核兵器のない世界を実現するために最大の努力を続けていくことを約束し、世界の人々と政府にアピールします。「長崎を最後の被爆地に！」

2018年11月18日
第6回核兵器廃絶地球市民集会ナガサキ

(2) 核軍縮の実質的な進展のための賢人会議について（報告）

ア 事業内容

- (ア) 期 間 平成30年11月14日（水）～15日（木）
(イ) 主 催 外務省
(ウ) 会 場 長崎県美術館、長崎原爆資料館 ほか

イ 被爆の実相プログラムの実施

賢人会議委員に長崎における被爆の実相を理解してもらうため、次のプログラムを実施した。

| | |
|-------------|--|
| 11月14日（水） | |
| 9:00～9:15 | 献花（平和祈念像前） |
| 9:30～10:10 | 原爆資料館視察 |
| 10:20～11:20 | 被爆体験講話聴講（追悼祈念館交流ラウンジ） |
| 11月15日（木） | |
| 8:30～9:00 | 城山小学校訪問（被爆校舎視察及び児童との交流） |
| 9:15～10:00 | 市民社会との意見交換（原爆資料館平和学習室） ※地元の高校生や被爆者団体、NGO等との意見交換 |

ウ 長崎での会議開催による成果

賢人会議委員が実際に被爆地を訪れ、平和祈念像前で献花し、被爆資料の視察や被爆者から体験講話をじかに聴くことによって、長崎における被爆の実相をより深く理解し、「長崎を最後の被爆地に」との思いを委員全員に共有してもらうことができた。特に長崎独自のプログラムとして、城山小学校の訪問を加えたことは、児童との交流や被爆校舎の視察を通して、地域における世代を超えた継承活動を知ってもらう機会となった。

また、市民社会との意見交換では、核抑止や核兵器禁止条約を巡り、委員とNGO団体、被爆者や高校生らにより活発な意見交換が行われ、被爆地の思いを委員に直接訴えることができた。